

先日、伊勢市国際交流協会が主催する講演会があり、インド出身のスタカランさんの話を聞くことができました。彼は20数年間、アメリカで過ごし、国連のカメラマンとして活躍してきました。ニューヨークで出会った日本人女性と結婚して現在は玉城町に住んでいるそうです。彼は多くのことを話しましたがその中で一番印象に残ったのは「日本人は英語が大変苦手です。大使館職員や大臣でもまともに話せない人がいる。国連内の就職の枠も、多額の予算を拠出している日本は多く割り当てられているのに、英語力の関係で採用枠に余りが出ている。幼稚園の年長と年少のこどもに、同時に英会話を教

えた場合、幼いこどもの方がはるかに聴き取りが良い」などという、英会話に関することでした。確かに、G7やG8といった世界会議の様子を見ていて感じるのは、外国の首脳はお互いに、和やかに話し合っているのに、日本の首脳だけは、ニコニコしてはいるが、ほかの首脳達とあまりコミュニケーションをとっていないように見えます。さらにスタカランさんは言います。「日本人は英語力が弱い。そのため、ビジネスの面でも外国に遅れをとっていくだろう。今や韓国など英語を得意とする国に、日本は圧倒されつつある」そういえば、インドの人達は公用語のごとく英

語を使っているのでアメリカなどへの進出が著しいと納得しました。日本の英語学習のあり方が問われて久しいですが、相変わらずリーディング（読み書き）中心の学習方法です。もちろん改善はされてきていると思いますが、英語も言葉であるので、耳で聴き、口でしゃべることが第一に重視されるべきではないかと思えます。私も、中学・高校・大学と10年間も英語を学んで、なおかつしゃべれないという経験をしました。小学校で5・6年間会話を勉強した方が良かったのではないかと気がえました。英語学習がどれほど役に立っているかを考えたとき、国単位でわたしたちがもつたいたない時間の使い方をしてきたのではないかと思つてしまいます。今、ようやく日本の英会話学習が変わろうとしていると思います。将来日本人が英語や中国語を学問としてではなく、実用的な言葉として身につけて、世界で活躍してくれることを大いに期待しています。

金子みすゞさんのまなざし(2)

矢崎節夫さん（金子みすゞ記念館館長）は、「金子みすゞ童謡集」のあとがきの中で、「わたしと小鳥とすず」という詩について次のように言っています。

「わたしと小鳥とすずと

わたしが両手をひろげても、お空はちつともとべないが、とべる小鳥はわたしのよう、地面を早く走れない。

わたしがからだをゆすつても、きれいな音は出ないけど、

あの鳴るすずはわたしのよう
に
たくさんうたは知らないよ。
すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがつて、みんないい。
『すずと、小鳥と、それからわたし、みんなちがつて、みんないい』とうたうみすゞの心のいのりが、だれの心にもやさしく、あたたかくひびいてくるでしょう。

みすゞの童謡は、小さいもの、力の弱いもの、無名なもの、無用なもの、この地球という星に存在する、すべてのものに対する、いのりのうただったのです。」

人権意識を高める視点というのは、この金子みすゞさんの小さないのちを慈しむ思いや、いのちなぎものへの優しいまなざしなのではないでしょうか。

